
ショートショート集

五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨートシヨート集

【Nコード】

N6377Y

【作者名】

五十鈴

【あらすじ】

200文字〜500文字くらいのお話のつめあわせ。現代ほのぼの恋愛ものが多いです。基本、お話一つ一つにつながりはありません。

01・恋わずらい

「恋わずらいを知ってる？」

君は言う。感情の読めない平坦な声で。
気まぐれな君は、そうやって僕の心をかき乱す。

「知ってるよ」

僕は仕方なく正直に答える。

「とてもとても、苦しいものだよ。」

けど、捨てることのできない、何より大切なものでもあるんだ」

この想いを消せたら、と悩んだことは一度や二度じゃない。

痛くて、苦しくて。自分の情けなさに吐き気まで覚えるほど。

それでも苦しみと同じくらい、しあわせを感じさせてくれるものだから。

結局、僕は君に恋わずらいをし続けるしかないんだ。

「難儀なものね」

君は笑った。

少し苦味を含んだような、微笑みだった。

02・君の歌

君の歌は輝いている。

キラキラと、僕の心に降り積もる。ふわふわと、僕の心を舞い上げる。

雪の結晶のように繊細で、桜の花びらのように軽やかで。

独り占めしているのがもったいないのに、僕だけに聞かせてほしいと願ってしまう。

歌が終わる。

僕が拍手を贈ると、君は恥ずかしそうに笑う。

「人に聞かせるようなものじゃないね」

君はわかっていない、君の魅力を。

「とてもきれいだ」

言葉で表せるわけもないけれど、僕は告げた。

君の分も、僕が君の歌を　君を、好きでいようと思っから。

03・雨と太陽と傘係

雨は好きだ。

傘を差すのが嫌いな君と、一緒に帰る理由になるから。

「健志が背高くなったら、私びしょぬれだね」

何がおもしろいのか、理香は笑いながらそう言った。

真昼の太陽みたいに明るい声と笑顔。

彼女自身がお日さまだから、雨が嫌いなのかな。そんなことをぼんやり思う。

「理香の傘係が務まらないなら、背なんていらないよ」

成長期にあまり伸びなかった僕は、理香と十センチも変わらない。

でも、僕はこのままがいい。

彼女がぬれるのも嫌だけど、彼女と帰る理由がなくなることが嫌だった。

そうして今日も、僕は雨に感謝する。

04・食べすぎ注意

「うっ、食べすぎたぁ」

口と腹を押さえて、美紀はげっそりした声でつぶやく。
気持ち悪い、と全身で語っていた。

アホだと思う。心底。

そう言ったらきつと『バカはいいけどアホはムカつく！』と意味不明な言葉が返ってくるだろう。

いや、今はそんなこと言う元気もないか。

「限度つてもんを知らねえよな」

隆はため息をつく。

駅前に新しくできたケーキバイキングに二人は行った。

時間配分も考えずにバカスカ食べまくった結果が、これだ。

「隆と一緒になら、無茶しても平気かなって」

どっぴり理屈だよ。とっぴこむこともできず、隆は顔を背けた。
赤くなった頬を、美紀に見られないように。

05・罰ゲーム

罰ゲームは愛の告白。

「横暴だっ!!」

「なんとでも」

私が怒りと共にぶちまけたトランプを、彼は平然と拾い集めてく。ひどい。ありえない。サイアク。こんちくしょう。

何を言っても効果がない気がして、心の中で好きなだけ文句を拳げ連ねる。

……そりゃあ、私からは、ほとんど言ったことないけどさ。

「ごういうのはむりやり言わせるものじゃないと思う!」

私は言い逃れを試みる。

「むりやりにでも言わせたいから、罰ゲームなんだろ」

トントン。集めたトランプを整えて、彼は箱にしまう。

横から覗き見た表情はどこか慚然としてる。

そんなに私に好きって、言ってもらいたいの？

そんなに私の言葉がないと、不安なの？

いつも余裕なはずの彼が、今はなんだかわいく見えて。

たまには素直になってもいいかな、と思った。

どこまでも広がる大空を、今日も彼は飛ぶ。
日の光をあびて輝く真白い翼を羽ばたかせて。

「やあ、今日はどこまで？」

仕事仲間が並んで飛びながら、声をかけてくる。
鮮やかな緑色の翼は、芽吹いたばかりの双葉を思わせた。

「海と二つの山の向こうさ」

「そりゃあ大変だ」

「腕が鳴るよ」

彼は朗らかに笑う。

「想いは早く届けた分、伝わるものだからね」

荷が重ければ重いほど、彼の翼は力強く羽ばたく。
込められた大切な想いのために。

07・綺麗な別れ方

「綺麗な別れ方ってどんなだろう?」

彼女は唐突にそう言った。

「何? 別れたいの?」

僕は平静を装いながら訊く。

内心は、気が気じゃなかったけど。

「さようなら、あなたのことが好きでした。

とでも言われたい?」

それが彼女にとっての綺麗な別れ方なんだろうか。

好きなら別れなきゃいいのに。

そう思ってしまう僕は、絶対に綺麗になんて別れられないんだろ
う。

「勘弁してクダサイ」

おどけつつも、かなり本気だったりする。

僕の答えに楽しげに笑う彼女を見て、別れは当分来なさそうだと
安堵した。

08・名前

「理人」

嬉しそうに、あなたが僕の名前を呼ぶと。
僕もつられて笑顔になる。

「理人」

甘えるように、あなたが僕の名前を呼ぶと。
僕は少しだけ困ってしまう。

「理人……」

助けを求めるように、あなたが僕の名前を呼ぶと。
僕にできることならなんでもしたいと思う。

あなたに名前を呼ばれるたびに、僕は僕になる。

あなたの声で呼ばれるたびに、僕は僕を知る。

あなたのことが好きだという、僕の想いの名前を知る。

09・中秋の名月

満月の月を仰ぎ見ながら、ふと君を思い出す。

「月は綺麗だけど、怖い」

前にそう言っていた君は、今も怯えているのだろうか。

一年で一番綺麗な満月を見ようと、こうして空を仰ぐ人が多い中、なんでもないふりが上手な君は、不安を隠しながら笑顔を浮かべているのだろうか。

君が無理をしていないか心配になって。

僕は携帯電話を開く。

すぐに駆けつけられる距離ではないけど、声なら届けられるから。

「あ、もしもし?」

10・願い

願いは叶うものなのか、叶えるものなのか。

そこにあるのは受動的な意志か能動的な意志かの違い。

「叶わせるものよ」

わがままな君は強気に笑う。

第三の答えを出せて、満足そうに。

「私の願いは、あなたにも、神さまにだって、叶わせてみせるわ」

僕の考えなんて興味ないし関係ない。そう言わんばかり。

君の中にある意志は、とても他力本願で、悲しいまでに無垢で。

きっと僕はその意志を守りたくて、君の願いを叶えてしまっただろっ。

11・愛憎

君のことが好きすぎて、好きだから苦しい。

僕の想いに気づきもしない君。

僕以外の男と話して、僕以外の男に笑いかける君。

純粹？ 無垢？

ただ子どものように考えなしなだけだ。

愛情は積もり積もるほど、憎悪に姿を変えていく。

愛おしさと、憎しみ。『愛憎』という言葉を感じほど思い知らされる。

綺麗なままではいらなかった自分が、悔しくて、哀れで。

この変質した想いを抱えながら、今日も僕は君に微笑みかけるんだらう。

君は何も知らずに、僕の笑顔にだまされるんだらう。

12・大好きが苦しい

「大好き」

恥じらいもなく、無邪気に告げる君。

向けられる笑顔に、言葉に、声に。

込められているのはただの“親愛”でしかなくて。

勘違いすらさせてもらえないほど、はつきりと、きっぱりと。

温度差が二人の間に消えることなく存在している。

「僕も、好きだよ」

声が上がってしまったことに、気づかれなければいい。

君にはいつも変わらず笑っていてもらいたいから。

そう、願っているのも本心のはずなのに。

たった一言を告げるのが、こんなにも……苦しい。

ガバツと、俺は跳ね起きた。
起きたと認識できたのは、ここが自分の部屋だと気づいてからだ
っただけ。

「夢、か……」

両手で顔を覆う。熱い。

ありえねえ。なんであんな夢見るんだよ。俺にどうしろってんだ
よ。

心中でいくら悪態をついても、鳴り響くチャイムは俺に現実を突
きつけてくる。

「亮、もう起きないと遅刻するよ〜!」

玄関の向こうからは元気な声。狭いワンルームでは嫌でも聞こえ
てしまう。

彼女の紅潮した頬や、やわらかな唇の感触がリアルに思い出され
て。

俺は熱を追いやるように息を吐いた。

どんな顔をして出ればいいのか。

考えてる時間は、もうない。

14・夜明け前

携帯の着信音で、僕は目が覚めた。

すぐには働かない頭で、それでも携帯画面を見ると、表示されたのは誰より大切な人の名前。

03:46という数字を視界のはしで捉えつつ、着信ボタンを押す。

「怖い夢を見たの……」

あまり良くない音質でもわかるほど、震えている君の声。
電話越しでも恐怖が伝わってくるようで。

「今からそっちに行くよ。ちょっと待ってて」

僕は迷わずそう言っていた。

困惑した声にわずかに安堵が混じってたことに、気づけないほど短い付き合いじゃない。

即行で着替えて、家を出る。チャリで飛ばせば十分もかからないはず。

ひかえめで、ほとんどわがママを言わない君が、頼ってくれた。
不謹慎だけど、嬉しいと思ってしまう。

怖がりな君は、この夜の闇にも怯えているんだろう。

早く君を、抱きしめてあげたかった。

15・お願い

「お願いがあるの」

君はいつも決まってそう言う。
上目遣いで、微笑んで。

甘え上手な君は、僕がその表情に弱いことを、きつと知っている。
それでも、この拷問のような役得を、他の誰にも譲りたくはないから。

「何だい？」

結局、今日も僕はあっけなく陥落する。
良いように使われているようで、情けなくもあるけれど。

君の小さく可愛らしい“お願い”を叶えてあげられる自分が、少し誇らしいとさえ思った。

16・いつか届いて

「好きだよ」

何度も、何度でも、僕は告げる。

馬鹿の一つ覚えのような僕の言葉は、君の心に届いているのかな？

「好きだよ。君が好きだ」

繰り返し、呼吸のように、僕は告げる。

情けないくらい震えた僕の声は、君の心に響いているのかな？

「……ありがとう」

君は笑う。寂しそうに。

まるで自分はいらない存在だとも思っているかのように。

僕の深い想いも、痛いほどの熱情も、欠片も伝わってはいないというように。

僕の愛は、君のその凍った心を、解かせるのかな？

君の本当の笑顔を、いつか、見ることができるのかな？

17・ありがとう

ありがとうの気持ちを君に届けたい。

何千、何万回言葉にしたって足りない思い。

君がいるから、僕を包む世界が優しく見える。

君がいるから、僕は僕の存在を許せる。

君がいるから、今の僕がいる。

君がいてくれてよかった。

そう言ったって、君は笑っただけだろう。

私は何もしていない。あなたの努力のたまものだ。とばかりに。

何も知らずに、無邪気に。

それでも僕は君に伝えたいんだ。

最上級の感謝の想いを。

ありがとう。

空を飛ぶ夢を見た。

風を切って、重力を感じずに、悠々と。

自由だ、と思った。

そう思った瞬間、飛べなくなった。

急に身体が重くなって、ニュートンのりんごのように、落ちた。
痛みを感じる前に、目が覚めた。

軽いめまいをやり過ぎしながら、僕は考えた。

人は、本当に自由なときは自由だとは思わないんだろう。

自由じゃない自分だから、自由だと思ってしまったんだろう。

また、空を飛んでみたい。

そうすれば、本当の自由は何か、少しは理解できるような気がするから。

19・電話の向いじ

電話の向いじから君の声が聞こえる。

心地良くて、ずっと聞いていたくなる声。

「じゃあ、また明日」

少し寂しそうに君は言う。

また明日、と返す僕の声も負けず劣らず沈んでる。

名残惜しいけれど、もう充分長電話をしてみましたし、切るしかない。

「優ちゃん」

一言、伝えたくて、僕は君の愛称を呼ぶ。

「好きだよ」

毎日言っても、足りない思い。

君のやさしい声が好き。君のかわいい笑顔が好き。君のきれいな心が好き。

誰より、君が好き。

「……私も」

小さな返事が、嬉しかった。

20・君に贈る花

荒廃した大地にも、花は咲く。

乾いた土から僅かな栄養をもらって。
照りつける太陽に負けないよう伸びやかに。

「これは、『スマイレ』……かな？」

可憐な花と分厚い本とを交互に見ながら僕は呟く。
そっだよ、と頷くように花が風に揺れた。

僕は《花の守人》だ。

生きるために必要な《水の守人》や、情報の伝達に役立つ《字の守人》ほど重要な役職ではない。

それでも、僕はこの仕事に誇りを持っている。

僕たちには余裕がない。

生きるのも精一杯で、食べるものに困らない日はないし、酷いときは水さえ口にできない。

そんな世界で、花を守るなんて……と言う声も少なくない。

食べられもしないものを、役に立たないものを保護するなんて馬鹿げている。許しがたい愚行だ、と。

けれど、僕はそうは思わない。

こんな世の中だからこそ、花が必要なんだと。
花を見て、綺麗だと感じる気持ち。和む心。
それは、僕たちにとって大切なものなんじゃないかと思う。

花を見れば、誰もが笑顔をこぼす。

日々を生き抜くだけでも苦しくて、音を上げたくなる中。

花は人の心を癒してくれる。

水がのどを潤すように、花は心を潤してくれる。

かつて、地上には緑が、花があふれ返っていたという。

古びた写真や、文献からしかうかがえない、けれど紛れもない事実。

今はこんなにも大地は荒れ果て、争いは絶えず、希望も見えない世だけだ。

いつか、いつか。

見てみたいと願う。

そうして、いつも花のような笑顔で僕を癒してくれる君へ、贈りたい。

大地いっばいに咲き誇る希望を。

21・大はっ見！

あのね、あのね。

ぼく、大はっ見をしたんだよ！

お星さまが毎日かがやいてて、たくさんあるのは、お月さまがさ
みしがらないようになんだ！

お月さまが毎日すがたを変えるのは、お星さまを楽しませるため
なんだ！

ね、すごいでしょ？

お月さまとお星さまは、たすけあって生きてるんだ！

夜のお空がきらきらしてるのは、『たすけあいせいしん』のおか
げなんだよ！

22・君色の空

いつのまにか、好きになってた。

自覚したのはつい最近。

思ってたより、僕は鈍感だったらしい。

気づいたときにはもう手遅れで、かなりの重症。

いつのまにか君の姿ばかり追ってる僕が目。

いつのまにか君の声ばかり拾ってる僕の耳。

目に映るもの、すべてに君を重ねて。

いつのまにか君の面影ばかり探してる、僕の心。

ふと見上げた空は晴れやかで。

君の笑顔を思い出す。

しょうがないなあ、というように。

君色の空が、優しく僕を笑った。

23・鼓動が跳ねる

初めは、冗談だと思った。

だって、まさかあなたが私なんかを、なんて考えたこともなかったから。

でも……。

「俺は美由のことが好きだよ」

その声が、息ができなくなるくらいいまっすぐで。

その顔が、目をそらせなくなるくらい真剣で。

本気なんだって、伝わってきた。

頬が熱くなってくるのは、あなたの言葉に照れたから。

泣きたくなってくるのは、あなたの気持ちが嬉しいから。

鼓動が跳ねる音が、耳に大きく響いた。

24・特別になりたくて

君の“特別”になりたかったんだ。

何にも誰にも無関心な、君の。

ほんの少しでも気を引きたかった。

好意じゃなくていい。

嫌われたって、憎まれたっていいと思っていた。

それで君の瞳に映れるのなら。

そう、思っていたはずだったのに。

「君が周りに興味がないから、皆も君に興味を持たないんだろうね」

君の傷ついた瞳を見て……これ以上ないくらい、後悔した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6377y/>

ショートショート集

2011年12月12日00時47分発行